

グローバル通信

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN
2025.3 vol.67

ソーシャル・イノベーション研究コースの最新情報	1
修士論文を書き終えて	2
2024年度修士論文・課題研究 題目一覧	3
地域リーダーシップ研究 第三回講演会感想	4
院生の声届けます。 - 2024年度を振り返って -	4
‘元’早期履修生の感想	4
事務局インフォメーション	4

凍てつく寒さも和らぎ、桜の季節まであと少しと迫る頃になりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。本号では来年度新設となる「ソーシャル・イノベーション研究コース」についての最新情報や、修士論文の執筆を終えた大学院生からの感想や修士論文・課題研究の題目の一覧、「地域リーダーシップ研究」をはじめとした大学院生の声をお届けしております。是非ご一読くださいませ。

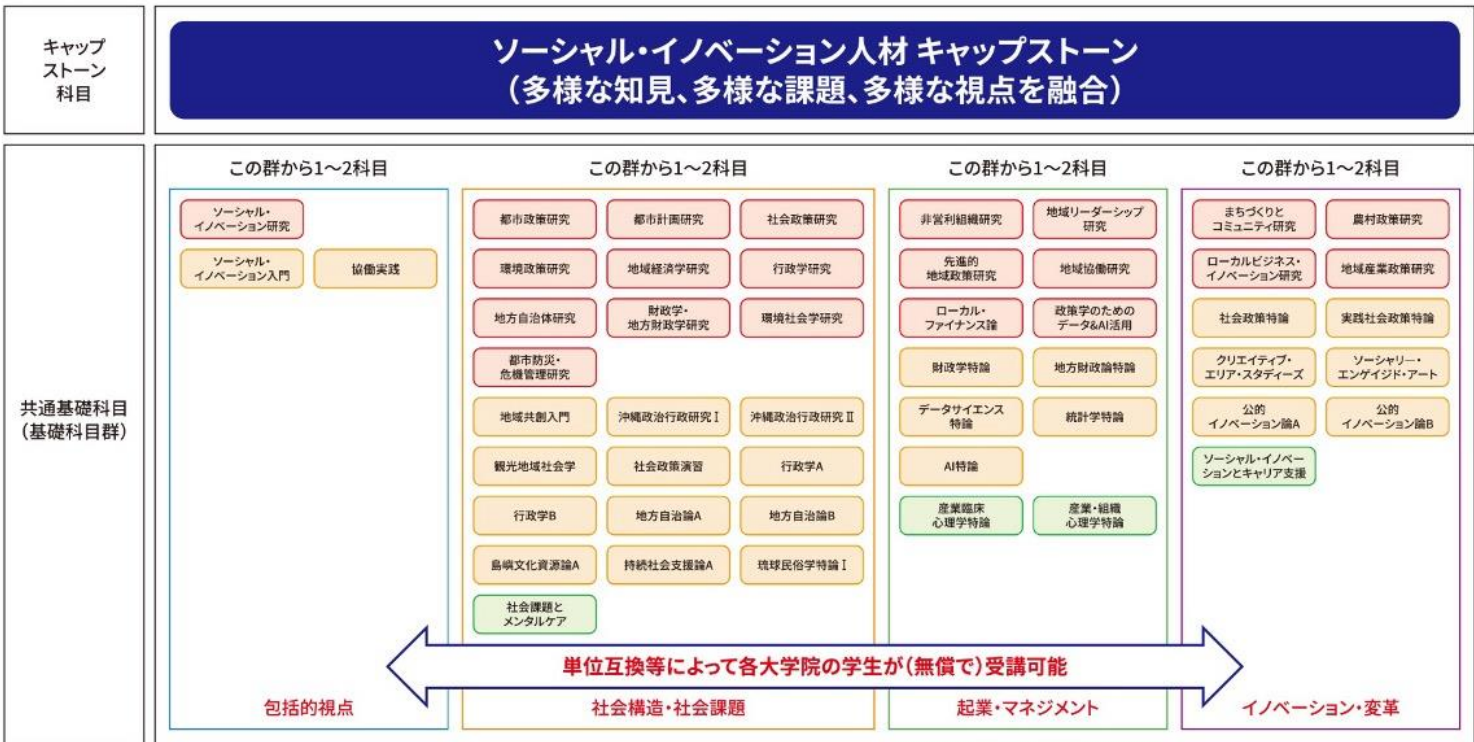
本号が地域公共人材研究プログラムに携われる皆様や、来年度から入学される皆様の一助となれば幸いです。来年度も皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

政策学研究科 地域公共人材総合研究プログラムに 「ソーシャル・イノベーション研究コース」を新設します。

ソーシャル・イノベーション・デザイナー（SI-D）資格制度の運用を開始

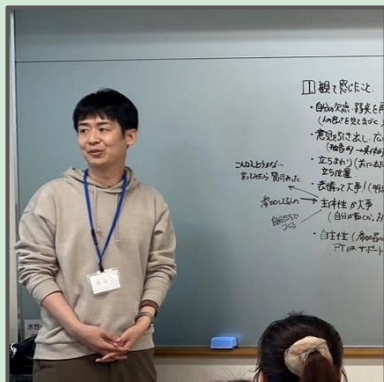
ソーシャル・イノベーション・デザイナー（SI-D）資格とは、ソーシャル・イノベーション人材のための職能資格です。認証された資格教育プログラムを修了し、資格申請すると「ソーシャル・イノベーション・デザイナー（SI-D）」資格が取得できます。学習アウトカムのレベルは、EUの教育・職能資格で用いられるEQFを参照し設定されています。SI-D資格はソーシャル・イノベーションで求められる能力を有していることの証明となります。基礎科目で10ポイント、キャップストーン科目で8ポイント、特別講義（一般社団法人地域公共人材開発機構提供）で2ポイントの修得が必要です（1ポイント＝学習時間10時間）。

基礎科目群とキャップストーンプログラム オープン科目は他大学の学生がオンライン等で受講可能



修士論文を書き終えて

本年度は18名から修士論文・課題研究の提出がありました。
本ページでは3名の大学院生から執筆のご感想を頂きました。



清水 孝平

(法学研究科修士課程1年)

私が龍谷大学の文学部生だった頃書いて以来、約20年ぶりの論文執筆。しかも今回は法学の修士論文です。希望して大学院に入学したものの、論文執筆が始まると「本当に自分が修士論文を書けるのだろうか、それも法学の…」と不安になることもありましたが、学部生の頃と比べると、研究環境が大変よくなっていました。特に情報環境の充実度には驚かされました。いつでもどこでも資料の検索や閲覧が可能というのは、働きながらの論文執筆に大きな助けとなりました。そして何よりも心から感謝したいのは、いつも丁寧に御指導をいただいた指導教員の先生や各自の分野から御助言をくださった先生方、そして同級生の皆さんです。ありがとうございました。論文の執筆は大変でしたが、仕事で書く文章とは違って、論文のルールを守りながら自由に自分の考えを表現できるという点は私にとって新鮮で楽しいものでした。また、論文執筆や授業を通して行政法を扱う上での重要な知識や考え方を学び、地方公務員の仕事の重要性や魅力を再発見できたことは、これからの私の人生や業務において非常に役立つと思います。この経験が無駄にせず、今後に活かしていきたいと思います。



渡邊 菜摘

(政策学研究科修士課程1年)

私は2022年に龍谷大学の政策学部を卒業しました。2年間一般企業に勤め「学部の頃の学びをもっと深めて、実践（仕事）に活かしたい」と思うようになりました。このような経緯から、政策学研究科に入学し、1年間で修士論文を執筆しました。執筆し終えて「もっと調査データをたくさん集められたんじゃないか」とか「もっと具体的な結論が書けたんじゃないか」とか、少し悔しい気持ちが残っています。ただ、この悔しい気持ちは、これからも学び続けたいという意欲や探求心とも捉えられると思っています。修士論文を執筆する機会がなければ、このような気持ちが湧いてくることもなかったと思うので、この意欲や探求心を今後も大切にしていきたいです。また、ご指導くださった先生方や一緒に学んだ大学院の学生たち、業務上のサポートをしてくれた職場の皆さんがいなければ、完成できなかったと思います。本当に1年間ありがとうございました。



松本 安弘

(政策学研究科修士課程2年)

私は、台湾の歴史的町並み保全の取り組みについて研究をしました。学部時代から大きくテーマを変更し、慣れない中国語に苦労しながらも、一日一歩ずつ努力を積み重ねた結果、無事に修士論文を完成させることができました。修士論文の執筆で最も学んだことは、「問いを立てることを惜しまず、諦めない姿勢」の重要性です。振り返れば、論文に費やした時間の半分は、問いの立て方に悩んでいたと言っても過言ではありません。事例や分析方法の面白さも重要ですが、自分が継続的に興味を持てる問いを見つけることでモチベーションを保てました。また、インタビューの際も、立てた問いに対して興味・関心を持って協力してくださる方が多かったように思います。今後は社会人として、どのような業務においても自分なりの興味や関心のフックを見つけ、新たな問いを立てられるように努めたいです。そして、ご指導いただいた先生方やインタビューにご協力いただいた方々への恩返しとして、学会への投稿や発表を通じて研究の質をさらに高めていきたいと考えています。

2024年度修士論文・課題研究 題目一覧

No.	区 分	修士論文・課題研究 題目	氏 名
政策学研究科			
1	修士論文	在日外国人の政治的権利の拡大について —武蔵野市住民投票条例案を手がかりに—	陳 曉曦
2	課題研究	中国のZ世代における知覚価値がロイヤルティとアドボカシーに与える影響に関する研究 —オーラルケア市場における中国製品と日本製品の比較—	木村 冬美
3	修士論文	戦後都市開発地区の遺産的価値と保全に関する研究 —オランダの復興地域遺産を中心に—	石黒 壮真
4	修士論文	都市空間に表出するジェンダー問題への課題と対応策に関する考察 —スウェーデンウメオ市「Gendered Landscape」を対象に—	久保田 夏樹
5	修士論文	輸送障害発生時の自治体の初動対応と情報連携の課題 —2023年1月24日に発生した大雪により列車立ち往生の事例から—	谷澤 莉音
6	修士論文	社会人の学び直し行動に関する要因分析 —大学院での学び直しとの比較—	畑田 麻帆
7	修士論文	「営み」の戦略的な再配置を通じた歴史的町並みの保全についての研究 —台湾高雄市における眷村跡の保全・活用プロジェクト「以住代護」を対象に—	松本 安弘
8	修士論文	市民参加手法としての市民討議会の意義と課題に関する研究 —制度化をめぐる3自治体の比較検討から—	森川 直浩
9	修士論文	社会的企業の新たな展開がもたらすサードセクターの拡張 —経営者の経験が導く組織融合について—	安井 慶子
10	修士論文	近世城郭の再整備とその象徴性に関する研究	吉田 瑞希
11	修士論文	現代社会における都市近郊寺院のあり方について —京都府城陽市の地域コミュニティを事例として—	龍村 薫
12	課題研究	女性保育士の復職におけるテレワークの可能性に関する研究	恵川 典子
13	修士論文	イベントにおけるリユース食器導入普及課題とその解決策に関する考察 —NPO地域環境デザイン研究所ecotoneの活動をもとに—	太田 航平
14	修士論文	自治体が設置するサードプレイスの構成要因と可能性について	日下 英明
15	修士論文	出会い・結婚・妊娠・出産・子育てに関する一貫した取組 —大津市の事例への現場からの考察—	近藤 瑛理奈
16	修士論文	廃校施設の民間活用事業に対する地域住民の意識形成 —元神戸市立湊山小学校跡地活用事業を事例として—	松尾 裕樹
17	修士論文	コミュニティ・バンクの店舗ロビーを交流空間として活用する可能性	渡邊 菜摘
法学研究科			
1	修士論文	自治体の債権回収を効率的に行うための情報共有の手法について	清水 孝平

地域リーダーシップ研究 第三回講演会感想

鎌田 康輝（政策学研究科修士課程1年）

下北沢のまちづくり活動に携わる下平憲治さんから、お話を伺いました。下北沢は多様性あふれるまちで、よく「住民参加型まちづくり」のお手本とされますが、その背景には住民の意見をしっかり反映させるプロセスがあったこと、下平さんのような地域やまちを盛り上げたい、良くしたいと思う住民がいたことが要因であると理解しました。また講義の中で、印象に残った言葉は、「人間は感情の動物で、人間は感情には勝てない。まちづくりは感情のぶつかり合い」です。この言葉を聴いて、私は腑に落ちました。まちづくりを進める原動力は感情であり、感情と理論がうまく絡み合いながら、日々まちづくりは進んでいると考えました。講義を通して私自身、まちづくりの視野が広がり、考え方がより深まりました。今回得た学びを、今後の修士論文執筆に繋げていきたいです。



院生の声届けます。－2024年度を振り返って－

周 晴輝（政策学研究科修士課程1年）

2024年度を振り返ると、社会人学生の皆さんとの交流から多くの学びを得た一年でした。社会人学生の方々は、それぞれ異なる職業や経験を持ちながら学ばれており、意見を交わすことで、これまで自分にはなかった視点や考え方に触れることができました。

同じ授業でも、職場での経験をもとにした具体的な意見や現場での実例が共有されることで、私自身の研究にも新たな発見や視野の広がりがありました。

また、学部時代にはあまり意識することのなかった「学びを社会につなげる」という感覚を強く意識するようになったのも、大学院での多様な交流のおかげだと思います。来年度もこうした経験を活かし、さらに研究に励んでいきたいと思っています。

吉田 伊織（政策学研究科修士課程1年）

学部時代より濃厚で刺激的な一年でした。学部時代は私は社会福祉学部で、社会福祉士の取得や社会福祉の課題という同じ方向を向いて過ごしてきました。しかし、この政策学研究科は全員が向いている方向が違います。そのような環境の中、一年修了の社会人の皆さんやそれぞれ異なった背景を持つ二年修了の学生たちと星が瞬く間のよう一年間を走り抜けました。最初の頃は「この研究科の選択で良かったのか」と不安でした。全く違う大学、学部からひょっこりやってきてもらってくれる温かい研究科で安心したのと同時に夏休みを迎えました。その後は冬の論文提出を見守りました。この期間に学友から得られるエッセンスは濃縮され、時には胃もたれしました。たぶん来年には私もこの胃もたれするようなエッセンスを吐き出しながら、刺激的な研究科で刺激的な毎日を生き抜いていこうと思います。

‘元’早期履修生の感想

川瀬 遥奈（政策学研究科修士課程1年）

今年度を振り返ると、学部4回生時に大学院科目を早期に履修して良かったと感じる点が2つあります。

1つ目は、履修登録の際に受講したい講義が明確になったことです。昨年度、早期履修生として大学院の講義に参加した際、大学院の授業がどのように進められていくのか、学生同士のコミュニケーションの機会がどれくらいあるのかなど、分からないことが多く、履修科目を選ぶのに苦労しました。しかし、早期履修を通じて、大学院の授業は少人数制で、学生同士が活発に意見交換する機会が豊富であることがわかりました。異なるバックグラウンドを持つ人々が自分の経験を活かしてコメントしている姿を見て、その環境で学んでいきたいテーマが明確になったと感じています。

2つ目は、入学前から先輩方とのつながりを構築できたことです。大学院は個人での研究が主になるというイメージがありましたが、早期履修を通じて先輩方と交流することができ、相談できる先輩が増えたことは非常に大きな意味を持ちました。実際、1年を通してそのつながりが支えになったと実感しています。

谷口 慎太郎（政策学研究科修士課程1年）

2023年度に早期履修を受講しましたが、その当時大学院の授業がどのようなものかつかめていなかった私にとって、大学院に慣れるための第一歩として非常によい経験になりました。私が受講した授業は社会人の院生の方はいなかったものの、授業によっては社会人院生ならではの知見や新たな人脈を得ることができると思います。また、ある程度単位を持った状態で大学院に入学できるため、その分空いた時間を他の課題や研究などに、有意義に使うこともできました。

事務局インフォメーション

○学位記授与式

日時：2025年3月15日（土）10：30～

場所：龍谷大学深草学舎顕真館

○入学式

日時：2025年4月2日（水）15：30～

場所：国立京都国際会館

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター『グローバル通信』 通巻67号 2025年3月

発行/ 龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム H P / https://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

連絡先/ 政策学部教務課

TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101

編集/ 安道亮、佐竹星哉

編集補助/ 今井航平、越野智晶

監修/ グローカル通信編集委員会